

和歌浦天満宮の文芸

柏原 卓

神前には諸種の芸能が奉納されるが文芸もその一つである。本稿では和歌浦天満宮に奉納された文芸について、二〇〇六年一二月の「和歌浦天満宮展」の準備を通して知りえた概要と特徴を述べ、資料を簡単に紹介することとする。それを通して、和歌浦天満宮をどのような人々がどのように信仰していたのかを説明する手がかりともなれば幸いである。

和歌浦天満宮に奉納され所蔵されている文芸は江戸時代の和歌と俳諧が多い。①和歌は、天神御詠歌と「歌仙」数種の古歌以外は、江戸時代の多様な詠草である。菅原道真の八〇〇回忌、八五〇回忌などに天満宮社主らのグループが詠みあったり、個人または連中が奉納したもの、その他の折々（月花の季節、霊夢に促されて、故人の追善）に個人が奉納したもので、短冊・厚紙、継ぎ紙、卷子、軸装、冊子などの形態がある。②俳諧は、和歌山の島順水が自他の作を刊行した数種の俳諧集と歳旦帖が主で、奥州の天満宮社主から贈られた俳諧集一冊などもある。

奉納文芸の作者は、天満宮社主ら神官・僧侶・武士などのグループから町人の島順水らまで広がっている。これらを通して、庶民層にまで文化が花開いた背景と、学問の神様としての天神にそれを奉納した人々の信仰が偲ばれる。

また和歌浦天満宮の所蔵資料以外にも、奉納文芸や地域文化との関わりを示す若干のものに言及したい。

一 所蔵文芸資料

展覧会のために和歌山大学紀州経済史文化史研究所が貸し出しを受けた資料のうち、文芸部門の資料の一覧表を示す。年代が判明するものは年代順に配列し、不明のものは後にまとめた。「その他」の中には、狭義の文芸には入れがたいが関連資料として文芸部門に分類したものもある。

〔和歌〕

- 一、寛文元(一六六一) 森十兵衛忠雄(行年二十三) 『奉納和歌三十首』一軸
- 一、元禄七(一六九四) 森十兵衛忠貫 『詠法楽十五首和歌』一紙(十一面観音真言)
- 一、元禄八(一六九五) 『聖廟御宝前奉納十五首和歌』三冊二一枚 ?
- 一、元禄十五(一七〇二) 『菅廟八百回忌奉納和歌三十首』短冊三〇枚 (「名前覚」別途)
- 一、享保七(一七二二) 『富士』絵と一首 一軸
- 一、享保十三(一七二八) 源清成(浅井忠八) 『奉納菅廟十首和歌』一紙(鳥居興治の付記)
- 一、元文五(一七三六) 『奉納分字和歌十五』

一、寛延三(一七五〇) 久能春子 歌卷 一軸

一、宝曆二(一七五二) 『八百五十年御神事奉納十首和歌』短冊一〇枚〔目録〕別途

一、宝曆二(一七五二) 願主藤原正臣『関南天満宮奉納十首』短冊一〇枚

一、宝曆二(一七五二) 『梅松桜奉納和歌』一箱(紀ノ川連中・粉河連中各一冊など)

一、文化五(一八〇八) 正木弥九郎平時鎮『聖廟奉納十首和歌』一紙

一、年不詳 権中納言藤原為村『二月二十五日詠二十五首』

一、年不詳 詠草いろいろ 一箱(箱書き無し)

一、年不詳 『天満宮奉納和歌』一軸(鏡文字の一首、神号、絵)

一、年不詳 『天神御詠歌一万首』

一、年不詳 『六歌仙』色紙六枚〔目録〕別途

一、天保八(一八三七) 『三十六歌仙画筆者目録』

〔連歌〕

一、元禄六(一六九三) 和合院長海『夢想の連歌』一紙(包み)

〔俳諧〕

一、元禄三(一六九〇) 島順水『俳諧破暁集』全一冊

一、元禄四(一六九一) 島順水『俳諧渡船』全一冊

一、元禄五(一六九二) 島順水『申歳旦』一冊

一、元禄七(一六九四) 島順水『俳諧童子教』上中下三冊のうち中一冊

一、元禄八(一六九五) 島順水『俳諧茶弁当』全一冊

一、元禄八(二六九五) 島順水『亥歳旦』一冊

一、元禄九(二六九六) 島順水『子歳旦』一冊

一、宝永六(二七〇九) 菅原秀勝『梅露』二冊のうち下一冊

一、延享元(二七四四) 木沢藤角『画発句橋の屑』全二冊

〔その他〕

一、寛保二(二七四二) 『奉納 神筆』一紙(紺地、経文のような漢字数行)

一、年不詳 『天神講式』一軸(漢文、有罫。内容は講式。)

一、元文五(二七三六)→寛保三(二七四三)含む 『(題不詳)』一軸(漢文、俳諧、立花奉納連中)

一、年不詳 神号 小型一軸(箱書き「明和二 奉納百首和歌」)

二 和歌

和歌は、冒頭で少し述べたように、①菅原道真の八〇〇回忌、八五〇回忌などに天満宮が中心となって奉納したものや連中・個人が奉納したもの、②その他の折に奉納したもの、③天神御詠歌や「歌仙」などの古歌に大別できる。以下に主な資料を簡単に解説する。

二一 回忌奉納の和歌

(一) 八〇〇回忌

元禄十五（一七〇二）年の菅原道真八〇〇回忌神事に奉納されたのが『菅廟八百回忌奉納和歌三十首』短冊三〇枚である。

これには別紙に作者一覧が残されている。「奉納和歌連衆名前」と題して横長に折り畳んだ和紙の表裏に記され、包み紙に「名前覚」と記す。記事は次のとおりである。（改行を「」で、改頁を「」で示す）

奉納和歌連衆名前

宗海 雲蓋院僧正 清成 浅井忠八 重成 中井弥右衛門 孝達 落合貞之丞 元直 松平九郎左衛門
盛政 桑山五右衛門 久綱 渡辺半五郎 日禅 養珠寺 憲紀 永田長四郎 幸雄 柴田世右衛門
守明 目加田治左衛門 憲順 六十谷 大同寺 俊明 大膳太夫嫡子 紀民部 忠村 上野又七
一昌 千賀市左衛門 正房 兵部少輔嫡子 安田右近 清勝 浅岡萩右衛門 俊弘 日前宮 紀大膳太夫
供重 玉津嶋 高松采女 正親 当社司 安田兵部少輔 已上

元禄十五年二月廿五日 八百年御神事

連衆の顔ぶれを見ると、末尾が「当社司 安田兵部少輔」で四名前にその嫡子も見えて天満宮の主宰神事にふさわしいし、末尾直前に近隣の主要な神社である和歌浦玉津島社と日前宮の宮司（嫡子も）が見え、雲蓋院（和歌浦東照宮の別当寺）僧正・養珠寺（初代藩主徳川頼宣の母の菩提寺で和歌浦に所在）・六十谷大同寺など僧侶も見えて社寺の交流関係が窺われるとともに、社寺以外の歌人も多い。彼らの伝記については未詳の場合が多く、今後の解明に待つこととしたい。

(二) 八五〇回忌

宝暦二(一七五二)年の八五〇回忌の資料は三種がある。

・ 『八百五十年御神事奉納十首和歌』短冊一〇枚

八〇〇回忌と同様、天満宮が主となった神事に奉納されたものである。別紙「目録」に作者一覧が見える。

・ 願主藤原正臣『関南天満宮奉納十首』短冊一〇枚

これは個人が八五〇回忌に合わせて奉納した短冊である。

・ 『梅松桜奉納和歌』

「紀の川連中」「粉河連中」などが、「梅」「松」「桜」で題詠した冊子各一冊を奉納している。那賀郡の粉河も含めた地域にまで、八五〇回忌を期して天満宮に題詠和歌冊子を奉納する動きが波及していたことが窺われて興味深い。

二二二 折々の奉納和歌

上記以外の時期に、いろいろな人が多様な趣向と装丁で和歌を奉納している。天満宮がこれらを受け入れる所であった点が興味深い。第一節にあげた「所蔵文芸資料」一覧からもその様子が窺えると思う。ここでは成立事情の面で特徴的な資料を選んで紹介する。

(一) 遺作集の奉納

寛文元(一六六一)年、森十兵衛忠雄(行年二十三)『奉納和歌三十首』一軸は、比較的古いものである点と、奉

納の動機の点で注目される。料紙すべてにわたって梅花などの風景を薄墨色で描いた絵を背景とする。奥書に「寛文元年閏八月」「森十兵衛忠雄 敬白 行年二十三」とあり、故人のため遺作を清書し卷子にしたてて天満宮に奉納したものと思われる。

ちなみに三〇年ほど後の元禄七（一六九四）年に森十兵衛在原忠貫が『詠十五首和歌』という仏教的要素を交えたものを奉納している。一五首の頭字をつらねると「おむろけいしむはらきりくそわか」となり、忠貫自身が注で「十一面観自在真言字」と説明している。

(二) 霊夢に恐縮して詠歌し奉納

八〇〇回忌和歌三〇首の作者の一人清成は、二〇余年後の享保一〇（一七二五）年に知人の霊夢に天神が「清成はなぜ歌を奉納しないか」と言ったことを知り、恐縮して歌作し享保一三（一七二八）年に『奉納菅廟十首和歌』を奉納した。大判厚手の和紙を継いでやや横長にした一枚に記す。またその事情を友人の鳥居橘興治が漢文で同様の和紙一枚に記したものが添えられている。

● 清成の奉納十首和歌

奉納菅廟十首和歌

源清成

海辺霞

おきかすみみきはもわかすわか
の浦の まつもみとりのひとつ色にて

松間花

山さくらまつをあらしのやとりとも しらてや花のえたかはすかな

暁時鳥

つれなさを月にのこしてほとゝきす 鳴てやいてし有明の山

江上月

散そめしいり江のやなき秋更て した行水の月にかけてそふ

野分萩

たかまとの野へのまはきの色ことに いまもみやこのにしきをやしく

夕千鳥

浦つたひ月待とてや夕くれの おなしみきはちとりともよふ

忍久恋

もらさしななみたの河のみをならす うきとし浪は袖にこゆとも

恨絶恋

うきなからうらみし秋にかへさはや かれ行野へのくすの下かせ

夜述懐

いつを我身にしつかなる折ならむ　ふけ行よはのねさめならては

社頭祝

みやかきの隔ぬ神のこゝろにも　まことあるをやなをまもるらむ

● 鳥居興治の事情書

(原文)

享保乙巳之秋一夜予夢詣弱浦「菅廟及拝于階下内扉自開忽有」辞曰浅井清成何不作歌而寄納「乎予平伏满身発汗而覚翌日以」告清成清成驚且謂曰我素信「聖廟曾欲述野情而献焉然身在」要劇屢触汚俗之事故久不果所「思然今吾子靈夢如斯実不勝恐」懼之至豈不敬奉　冥慮哉清成「於是每得暫時間暇潔身構思漸」成十題之詠且不敢自是直達諸「京師得承藤原実陰卿清点時謹」書以納于社内予亦辱蒙　靈感「之旁及因請以書于卷尾」
享保戊申二月穀旦　鳥居橘興治

(読み下し文)

享保乙巳ノ秋一夜、予夢ニ弱浦菅廟ニ詣ル。階下ニ拝スルニ及ビ内扉自ラ開キ、忽チ辞有リ。曰ク「浅井清成何ゾ歌ヲ作り寄納セザル」。予平伏シ满身発汗シテ覚ム。翌日以テ清成ニ告グ。清成驚キ且ツ謂テ曰ク「我素ヨリ聖廟ヲ信ジ、曾テ野情ヲ述テ献セント欲ス。然ルニ身要劇ニ在テ屢汚俗ノ事ニ触ル。故ニ久シク所思ヲ果サズ。然ニ今吾子ノ靈夢スノ如シ。実ニ恐懼ニ勝ヘザルノ至リ。豈ニ冥慮ヲ敬シ奉ズヤ」。清成是ニ於テ暫時間暇ヲ得ル毎ニ、身ヲ潔メ思ヲ構ヘテ漸ク十題ノ詠ヲ成ス。且ツ自ラ是トセズ直ニコレヲ京師ニ達シ藤原実陰卿ノ清点ヲ得テ謹書シ、以テ社内ニ納ム。予モ亦、辱ク靈感ヲ蒙ル旁、因テ請テ以テ卷尾ニ書スルニ

及ブ。

享保戊申二月穀旦

鳥居橘興治

鳥居興治の記すところによれば、靈夢を告げられた清成は以後、暇を見つけては身を潔め思いを構えて十題を詠んだがそれで満足せず、京都の藤原実陰卿の添削指導を受けてから謹書して、天満宮に奉納した。鳥居も靈夢を受けた縁で、事の顛末を十首の巻尾に書くことを買って出たという次第であった。学芸の神としての天神菅原道真の面目が躍如としているし、清成浅井忠八・鳥居興治の尊崇の念も現れ、かたがた和歌指導の権威として京都の公卿があつたことも分かる、興味深い資料である。

三 連歌

奉納連歌には、和歌浦東照宮別当寺たる天曜寺の子院、天曜寺和合院の三世住職長海が奉納した『夢想之連歌』がある。木箱に納め、包み紙に「上」と上書きしてある、懐紙四折の表裏に、八名で百句を連ねた八吟百韻である。ただし発句の作者は無名であり八名が一巡したところで「執筆」名義による一句が有る。また、二折裏から四折表までの四面では作者名の位置にそれぞれ「一」から「十四」までの数字を記すのみである。これらの句は直前直後を長海が吟じていることから見て、長海の独吟と考えてよからう。箱書きと本文冒頭によって概要を示せば次のとおりである。

〔箱上書き〕

元禄六

癸酉

天五月廿五日

夢想之連歌

和歌山和合院長海敬白

〔蓋裏書〕 和歌山天曜寺 第三世和合院長海 敬白

〔本文〕

元禄六癸酉五月廿(原文ノママ)日

夢想之連歌

田子の浦や打出の「浜や富士の山

千年の松の」茂り合宿 長海

庭に飼鶴の」諸声豊にて 正親

空より春の」光おさまる 忍可

見る、もいさよふ」月や霞む覧 光見

鎖ひらはは」袖長閑なり 友可

雪解る麓の」風の絶々に 円相

沢辺の若葉」くえ初る比 行雄 (一折表)

里人の群つ、」かよふ野を広み 宗海

涼しくなりぬ」道の末々 執筆

(以下省略)

東照宮別当寺たる天曜寺の子院の住職が中心となって連歌を興行し、天満宮に奉納している事実から、神仏習合はもちろん東照宮と天満宮の関係も知られて興味深い。

天満宮発行のリーフレット『和歌浦天満宮由緒記』（昭和五五年二月二五日の筆塚建立以後に発行）の「宝物」の項に「一、懐紙（連歌）一綴 寛文元年四月徳川頼宣卿」と記されているけれども、今回の展示に際しては所在を確認できなかつた。

この懐紙の姿をうかがえる資料として『和歌浦天曜寺 寛文元年日記』の記事がある。紀州経済史文化史研究所所員の米田頼司氏に該当部分のコピーを借覧させていただいたので、ここに紹介する。

〔和歌浦天曜寺寛文元年日記〕卯月〕

廿五 ；殿様六十ノ御賀ノ連歌、江戸ニテ昌雅第三迄、可致、下信ノ懐紙事、付紙五枚とち候へく候。桐ノ箱ニ入、雲蓋院江戸ヨリ持参可致。四句メヨリ公永独吟ニ可致。今日午ノ剋ニ天神ニテ開可申候。

天神東ノ方ノ回廊東ヲ上ニシテ重疊ヲ敷。今度松欝寺作り可申候。文台ニ香炉ト江戸ヨリ参候懐紙箱トヲ載（セ）、香ヲ焼き、又常ノ文台ニ前ノ箱ヲ開キ、懐紙ヲ開キ載セ、人皆列座シテ後、執筆忍可、懐紙ニ筆ヲ取済、発句ヲ吟ス。

千々の春も松やときはに和歌の浦 ト三反吟シ 昌雅ト云

霞む葦辺ニ遊ふ友鶴 ト二反吟 頼宣卿ト云

雁あさる真砂の上ハ長閑にて ト二反吟 御一門ト云〔是迄。連衆、驚テ聞ク〕

其後四句メヨリ一反ツ、吟シ百韻目ヲ二反吟シ、如前、文台ニ置（キ）重疊ノ上ニ置（キ）退（ク）。其後ハ振舞へ出ツ。：

この記事によれば、初代藩主徳川頼宣の六十の賀に和歌浦天満宮で連歌を興行奉納することになった。江戸で第三句まで昌雅が吟じてから付紙五枚と綴じて桐箱に入れ、雲蓋院住職（日記著者）が持参して、和歌浦天満宮で四句以下を公永が独吟する予定となった。

寛文元（一六六一）年卯月二五日の当日、執筆の忍可が懐紙と筆を手に発句から吟じ始める。発句昌雅、脇句頼宣卿、第三句御一門というところまで聞いて一同大いに驚いた。

このように藩主自身が和歌浦天満宮の連歌奉納に、自ら先頭に立って協力を惜しまなかった様子が分かる。

この連歌の執筆を務めた忍可は、三二年ほど後になる前項の元禄六（一六九三）年『夢想之連歌』連衆に見える忍可と同一人であろうか。後考をまちたい。

四 俳諧

俳諧資料では、前掲の所蔵資料一覧にもあるとおり、宝永六（一七〇九）年刊菅原秀勝『梅露』二冊のうち下一冊（奥州の天満宮社主より寄贈）、延享元（一七四四）年刊木沢藤角『画発句橋の屑』（職業や風物などの絵と発句）全二冊もあるが、量的にもまとまった貴重なものとしては、紀州の島順水の句集と歳旦帖とを上げるべきである。

四―一 島順水についての先行研究

順水の伝記および作品性格についての先行研究を一つずつ上げ、特に後者について作品に即して少し論じることにする。

(一) 貴志康親『紀州郷土芸術家小伝』(続編)「俳之部」「島順水」の項

島 順水、和歌浦の人にして家大に富めり、池西言水に就て俳諧を学び、甚だ之を善くし、当時井原西鶴と並び賞せらる。

和歌浦の人というのがどのような証拠に基づくか未詳である。後述するように順水の俳諧集や歳旦帖によれば、和歌山城下の「本町三丁目」を居所とし、少し北の紀ノ川に近い「嘉家作(かけづくり)」に別荘を持っていたことが分る。

(二) 西山隆二氏「順水の『渡し舟』」

西山氏は標記の論文(『紀州文化研究』紀州文化研究所、第二巻第三号・昭和一三年三月)の冒頭に次のように述べる。

紀州若山の嶋順水が撰んだ『渡し舟』は、撰者こそ紀州の人であるけれども、別に紀州らしい色彩のある俳書とも見えない。採録されてゐる句は大阪の人最も多く、紀州の人は順水を除く外は、意水、松嵐、門秋、吹角、是琴の五人に過ぎず、しかも各一句のみ採録されてゐると云ふ貧弱さである。順水が来山・才磨・西鶴・鬼貫・西吟などとの交遊から得た俳壇に於ける地歩を以て紀州に統率者たらんとするは易々たる事で、幾多の門人をも擁し得る筈であるが、彼はたゞ大阪乃至京の一流俳人と交る事に趣味を有してゐるに過ぎなかつた。

『渡し舟』はさうした彼の趣味のあらはれであつて、紀州俳人の存在を認めしめようと云ふやうな野望を毛頭認められないものである。それは又採録されてゐる句が一派に偏せず、貞門・談林・伊丹派・蕉門何れにもわ

たつて、大家を網羅してゐる点からも察せられるのである。(54ページ)

「大阪乃至京の一流俳人と交る事に趣味を有して」いたとか「採録されてゐる句が一派に偏せず、貞門・談林・伊丹派・蕉門何れにもわたつて、大家を網羅してゐる」と言うあたりはおおむね納得が行くが、ほんとうに島順水は京大阪ばかりを向いて紀州の俳人という自覚が無かつたのであろうか。彼の俳諧集に紀州らしい色彩は無いのだろうか。署名の様式、若山での吟を中心に検討していく。また彼が他でもない和歌浦天満宮に句集や歳旦を奉納したことが、紀州人の自覚の現われとも見られるのである。

四―二 島順水の句集と歳旦から

(一) 署名の様式

まず俳諧集末尾の刊記から見ていけば、

・ 時元禄三庚午 無射中浣「紀陽若山」島順水自跋「寺町二条上ル町」井筒屋庄兵衛板 (『俳諧破曉集』)
・ 紀州若山「嶋順水」元禄四辛未歳睦月上旬「京寺町二条上ル町」井筒屋庄兵衛板 (『俳諧渡し舟』)

次に京寺町井筒屋から刊行された歳旦帖の本文冒頭を見ると、

・ 元禄五申「天下泰平国土安穩」紀州若山「嶋順水」(『申歳旦』)
・ 元禄八亥「紀州弱山」松花堂「島順水」(『亥歳旦』)
・ 元禄九子「紀州若山」松花堂「島順水」(『子歳旦』)

のようになつていて、俳諧集でも歳旦帖でも必ず「紀州(紀陽)若山」を冠している。このことだけで紀州の俳

人としての自覚を云々することはできまいが、一種の前置きとして「紀州若山」を常用していたことは確かだと
言えよう。

この外に、奉納に当たって手書きされた署名が俳諧集の裏表紙内側にある。

・ 本三丁目 島孫右衛門重幸 順水 撰之 (『俳諧渡し舟』)

・ 奉納俳諧茶弁当 壹冊 子歳旦句帳壹冊 元禄九年子五月吉辰 本三丁目 嶋孫左衛門尉重幸 順水敬
白 (『俳諧茶弁当』)

これらに見える「本三丁目」は和歌山城下の「本町三丁目」で商業地である。これら毛筆書きの署名では、俳号
だけでなく姓名をすべて記すとともに、居所を詳しく記している。天満宮への奉納に際して改まった態度を示し
たものと言える。この時には、天満宮に程近い和歌山城下の住人であり天満宮を信仰する者であるという、自己
意識が改めて起こったと思われる。

(二) 紀州俳人の入集

西山隆二氏が言われるように、「紀州に統率者たらんとする」気持ちや「紀州俳人の存在を認めしめようと云ふや
うな野望」には乏しかったかもしれない。『渡し舟』の紀州俳人は、意水・松嵐・門秋・吹角・是琴だけだった。

他の俳諧集と歳旦帖からも多くを補充できない。『童子教』は中巻以外は紀州以外の俳人との両吟で、外は未見。
『茶弁当』は大阪の西吟との両吟ばかりである。ただし歳旦帖では元禄五『申歳旦』に「(橋本)是琴」、元禄八『亥
歳旦』に「(橋本)可楽」と紀州橋本の俳人が注されている。しかし歳旦帖では地名注の無い俳人がほとんどである。
『渡し舟』によって紀州俳人と分かる「松嵐」も『申歳旦』『亥歳旦』に地名の注が無い。多くの注の無い俳人の
中には紀州俳人があるかも知れない。

たしかに紀州俳人を統率し存在を認めさせる志向は乏しいかも知れないが、「紀州俳人とのネットワークもあつた」とまでは言えよう。

(三) 紀州の現地吟や紀州素材

次に視角を変えて、俳壇形成の側面ではなくて素材の側面での「紀州素材押し出し志向」を評価したい。

〔破曉集〕

元禄三年刊の『破曉集』は、前半が多くの俳人のアンソロジー、後半は順水が独吟で「四季の発句」「独吟連歌」を編んでいる。発句(秋・冬の部)中に次の例がある。

・ 己のとし名月 此拝殿にて

月ひとつ名にや呼たつ玉津嶋

更てくもりしに

宵まては似せてにさりし和歌の月

(本文一六丁裏)

・ 和歌天神にて

早梅に松は時雨る立枝かな

(本文一八丁裏)

〔渡し舟〕

元禄四年刊の『渡し舟』については、すでに西山隆二氏が次の例を挙げておられる。

・ 和歌浦へ西吟ともなひて

御覽せよかたほ浪こそ雪の船

順水

松風や殊に冬めく玉津嶋

(桜塚) 西吟

鶺鴒や雪の日も行妹背山 同

ひやくくとけふは雪ふれ庭の松 順水 (一四丁裏・一五丁表)

〔茶弁当〕

元禄八年刊の『茶弁当』は、島順水の嘉家作の別荘（本町の居所から少し北で、紀ノ川に近い）に大阪の西吟を招いての両吟。別荘の庭には若山の八景が配されており、それを題にしている。一丁裏から二丁裏にかけて庭の絵（線画・無彩色）がある。八景は「若宮之夜雨」「名草山之月」「中ノ島之落雁」「観音寺晚鐘」「松原之夕照」「欠作之晴嵐」「紀ノ川之帰帆」「藤代之暮雪」である。「欠作」は「嘉家作」に同じ）

『破曉集』『渡し舟』では紀州素材がごく一部で特色とまでは言えないが、『茶弁当』になると、前半は若山の八景を題にしている大いに紀州の特色が出たといえる。

以上から、島順水は和歌山城下に居住し、紀州で門流を形成することは弱かったが、京大坂に往来して著名俳人との両吟やアンソロジーを京都寺町二条上ル井筒屋庄兵衛からたびたび出版した行動派俳人と言える。作品には紀州の現地吟もかなりある。その人物が和歌浦天満宮を信仰し、出版成果をその都度丁重に奉納したのである。

参考文献

- 貴志康親『紀州郷土芸術家小伝』（正統）
西川隆二「順水の『渡し舟』」（『紀州文化研究』紀州文化研究所、第二卷第三号・昭和一三年三月刊）
『和歌浦天満宮由緒記』（和歌浦天満宮、昭和五五年一二月以後に刊）